



「短歌を学んで短冊を書こう」

小学生短歌 優秀作品発表!

先日、創学舎の各教室で「七夕イベント」を開催致しました。

短歌という「歌」が詠まれてから、一五〇〇年以上の時間が流れ、現代の小学生たちが一生懸命に歌を詠みました。短歌に願いを込めて、「五・七・五・七・七」「三十一音という制限の中、皆さん、本当によく頑張ってくれました。六月の百人一首大会と同様、毎回のレベルが上がっていても嬉しいのです。

創学舎では、「イベント」、「百人一首の暗唱」を通じて「地頭を鍛える訓練」をしています。

夏休みは、「読書」や「古典作品」に触れることができる絶好の機会です。ぜひ、素晴らしい作品に出会ってほしいと思います。

創学舎 短歌審査委員会 審査委員長 関野 光希子

★特選(一名)

たんざくに 願いをこめて かざります

「無事に二人が会えますように」

【受賞者 小林 純麗さんの喜びの声】

創学舎に入って、一年もたっていないのに、特選をとれるなんて嬉しいです。

【柏教室室長 五日市 浩より】

短冊を渡したら、あつという間に書き上げていましたね。自分のことではなく、他者の幸せを願っている心の広さと優しさが伝わってきます。

★金賞(二名)

「終わったー」と 丸つけのあとの

達成感 ページまちがえ 絶望感

【受賞者 関若葉さんのコメント】
二年連続の入賞、とてもうれしいです。

【新柏教室室長 松尾 裕史より】

リズム感があり、宿題に取り組む人間の気持ちを見事に詠っていますね。受賞おめでとうございませう。

中学で モテ男になるぞ 絶対に

今ひとたびの 彼女待たなん

【受賞者 野村 優希くんのコメント】

ユーモアのある明るい短歌にしたいと思いました。このような賞をいただき感謝しています。本当にありがとうございます。

【新松戸教室長 村田 寛之より】

「学ぶことは真似ることから」百人一首暗唱を通して覚えた短歌をうまく生かして、狙い通りのユーモアたっぷりの短歌を詠んでくれました。野村くん、最高!

★銀賞(二名)

動く時計 チクタクチクタク 走ってる

だけど ゴールはありません

【受賞者 熊谷 有納さんのコメント】

入賞できて、よかったです。

【新柏教室室長 松尾 裕史より】

日常生活の何気ない部分にスポットを当てた作品ですね。受賞おめでとうございませう。

願いごと かなうといいな たくさんの

願いがかなうと 笑顔あふれる

【受賞者 石黒 花奈さんのコメント】

選ばれてうれしいです。短歌が好きになりました。

【我孫子教室長 長坂 浩之より】

普段多くは語りませんが、授業中はとても真剣な石黒さん。願えば必ずかなうはず。がんばれ!

★銅賞(七名)

短冊が 風にふかれて とんでゆく

空の果てまで 願いとびゆく

【受賞者 山本 詠万さんのコメント】

皆の願い事かなうといいです。

【我孫子教室長 長坂 浩之より】

とても素敵な情景が詠まれていますね。とんでいった願いかなうことを祈っています。おめでとうございませう!

小一の 妹覚える 百人一首

意味も知らずに 覚え続ける

【受賞者 畑佐 実里さんのコメント】

選ばれるとは思っていませんでしたので、とてもうれしいです!

【江戸川台教室長 森 清志より】

銅賞受賞おめでとうございませう!

妹が頑張つて覚えるようとしている姿を、温かく見守っているお姉さんの様子が思い浮かびます。

森林の 中に入ると 虫の声

少しすずしい 日かげありけり

【受賞者 岡田 大和くんのコメント】

受賞できると思わなかつたので、とてもうれしいです。

【柏教室室長 五日市 浩より】

木陰の静寂、木々の緑、虫の音。夏の瞬間を切り取った、絵はがきのような歌ができましたね。

パチパチと せんこう花火 おどるよう

私の心もパチパチおどる

【受賞者 岸田 佳音さんのコメント】

自分が作った短歌で賞がいただけ、よかつたです。

【新柏教室室長 松尾 裕史より】

線香花火と自分の心を重ね合わせた趣深い作品ですね。受賞おめでとうございませう。

上げるんだ 苦手な国語 文章題

勉強がんばり 満点とるぞ

【受賞者 松本 涼誠くんのコメント】

初めて銅賞をとつて嬉しかつたです。次もとつてみたいと思います。

【新松戸教室長 村田 寛之より】

国語の授業中、一生懸命真剣に取り組んでいる松本くん。漢字テストはほぼ満点。文章読解問題では簡単に諦めることなく、粘り強く取り組んでいるので、絶対に得点力が上がります!

月みれば お空が光る 不思議だな

月の中には うさぎがうかぶ

【受賞者 本城 隼人くんのコメント】

銅賞受賞 素直にうれしいです。

【パーソナル我孫子教室長 松永 弘文より】
映像が浮かぶ、素敵な短歌になりましたね。

夏の夜は 光り輝く 星たちが

きれいに光り 夜空みあげる

【受賞者 長谷川 駿斗くんのコメント】

次は金賞をとれるようにがんばりたいです。
【パーソナルおたかの森教室長 矢上 有一より】
夏の風情が感じられる、素晴らしい短歌になりましたね。



勉強法を知らない生徒たち②

各高校では、市販の単語帳が指定されて、単語テストが行われます。(創学舎でも、単語テストを実施しますが、そのやり方については後述。)それ自体は、意味のあることですが、大半はほとんど役にたっていない。それは、次のような問題が指摘されることなく、実施されているからです。

- ①発音できない単語の訳を平気で覚えようとする。
- ②訳の日本語の意味が分からなくとも平気で覚える。
- ③覚えることがどういうことなのか説明されない。
- ④載っている訳(意味)は全部覚えろと指示。
- ⑤単語は書いて覚えろと指示。

大体はこんな所です。一つずつ説明していきます。

●まず①。教える立場の人は発音できない単語を覚えるなんてしなかつたはず。無意識の前提として、必ず発音できるようにしていたのです。無意識ですから、大事とも思っていないし、生徒にも伝えません。②も同様。教える人は無意識に意味も調べたり類推していたはず。これも無意識ですから生徒には伝えません。

●③について。「覚える」ことの身に言及する指導者はほとんどいないようです。また「覚え方」についての指導もお寒い限りです。かなり勉強を頑張ったであろう保護者の方も同じです。これも「無意識」のうちに覚える行為を実施、一定の成果をあげたことが理由です。

●一体「覚える」記憶する「ためには「感情が大きく動くこと」が必要とされます。例えば、夜不審者に追いかけて逃げて無事だったとします。これは半永久的に忘れないでしょう。体育祭のリレーで自分がバトンを落としたためにビリになった。これも大きく感情が動いたので忘れないでしょう。また記憶には「反復」や「意味づけ」「関係づけ」なども有効です。英単語についていうと、「感情を動かす」

ことと「反復」が利用できるのですがこれを知る人は少ないようです。具体的には後述します。

●さて、「覚える」記憶する「ことを指導するには、「記憶」の段階の分析と受験生としてのどの段階を目指すかの指示が必要です。因みに用語は、一般的なものを多少加工してあります。

- (1) 超短期記憶。テレビで見えて印象に残った商品名などを数秒で忘れてしまうような場合です。
- (2) 短期記憶。単語テストがあるので覚えて合格したが、二、三日たつたら忘れていたような場合です。
- (3) 中期記憶。数ヶ月もつもの。
- (4) 長期記憶。年単位で残るもの。
- (5) 半永久記憶。
- (6) 永久記憶。

以上六種類に分けます。

●受験生が最終的に目指すのは、(4)の長期記憶です。ただ、指導者は覚え方を伝えないと同様に、どの記憶を目指すのか伝えません。一定の成果は得たのですが、これも「無意識」だったからです。結果、大半の生徒は、それぞれに勝手な取り組みをして、覚えられないと嘆くこととなります。

●④の「載っている意味を全部覚えろ」も生徒を苦しめます。「最終的に全部覚えろ」であって最初は意味を一つだけでよいのです。実は、使用している単語帳の単語の意味が一つ、ポンポン出てくるだけでも、受験生としては相当の学力といえます。

●⑤の「単語は書いて覚えろ」も危険です。④と並んで、一気に山の頂点を目指すことになるからです。但し、中学生は書く練習も大切です。一定のレベルの単語(千語くらい)はすらすら書けないといけません。大学受験生の場合は旺文社の「中学英単語一八〇〇」くらいは書ける必要があります。しかし、その上のレベルは発音できる意味が一ついえる意味が全部いえる派生語も識別できる書け



る」と段階を設け、一歩ずつ行くのが正しいといえます。

●では、いよいよ単語の覚え方です。現在の高三生で、一日一九〇〇個やっている人が数名います。時間は四十分から六十分。いずれもと速くなるはず。ただ、これは恐らく私しか知らない方法なのでなかなか信じてもらえません。教える仕事に携わっている人もかなり勉強をなさった保護者の方も同様です。(以下次号) (小林)

『夏の花』、他二篇を読む

■突然急降下か急上昇か、大空をかきむしる爆音がした。空襲！女が叫んだ。物音を聞いたのはそれだけである。文字にすれば原爆投下の一瞬はたったこれだけで終る。ピカもドンもない。秒速三六〇メートルの爆風も知らない。気づいたら倒壊家屋の下にいた。

■あたりは静かにしんとしていた。新聞では「一瞬の間に阿鼻叫喚の巻と化した」と書いていたけれども、それは書いた人の既成観念であって、じっさいは人も草木も一度に皆死んだのかと思うほど気味悪い静寂さが襲ったのだった。

■うづくまった中年の婦人の顔があった。たましいのぬけはてたその顔は、見ているうちに何か感染しそうな顔だったのであった。こんな顔に出くわしたのは、これが初めてであった。が、それよりもっと奇怪な顔に、その後わたしは限りなく出くわさねばならなかった。

一九四五年、日本と戦争をしていたアメリカは原子爆弾の開発に成功し、八月六日と九日、広島市と長崎市に相次いで投下しました。

原子爆弾が爆発すると、空中には六千度の火球が

出現し、広範囲に熱線を浴びせました。続いて台風のエネルギの千倍に相当する爆風が街を襲い、さらに、生物の細胞や遺伝子を破壊するほどの大量の放射線が照射されました。当時、二つの市の人口は合わせて五十六万人でしたが、原子爆弾の投下から五年間で亡くなった人数は三十万人にも及びます。

冒頭の三つの文章は、その被爆当時の状況をつづった小説から引用しました。順番に、林京子『祭りの場』、太田洋子『屍の街』、原民喜『夏の花』という三篇です。これらは、一般の市民ではなく、実際に執筆活動を仕事としていた作家自身が被爆して、その記録を書き留めたという点で特殊です(林京子は被爆当時十四歳で、一九七五年に『祭りの場』を発表し芥川賞を受賞しました)。

原と太田は、広島で被爆しました。奇跡的に大きな外傷のなかった二人は、「ふと、おのれが生きていることと、その意味が、はっと私を弾いた。このことを書きのこさねばならない。」(原)「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任だもの。」(太田)との思いから、わずか数カ月で、小説を書き上げます。そこには、作家らしい冷静な観察があり、その描写は、まるで、その場にいるかのような錯覚におちいるほど、生々しく迫ってきます。

原子爆弾の投下から七十三年もの年月が経ちました。人々が、自分とは無縁の歴史上の出来事だと、とらえてもしかたない長い年月です。しかし、その長い年月にもかかわらず、どんな戦争においても、再び人に向けて核兵器は使用されていません。それは、核兵器の使用がどれだけ大きな破壊をもたらすかを、広島と長崎の犠牲が、世界に知らしめていたからです。その苦しみがどういふものであるか、私たちは同じ言語によって学ぶことができます。ぜひ、一冊でも手に取って、「知る」ことから始めてほしいと願います。

(関)